

華嚴経について

隋の智顛は、天台大師智顛とも呼ばれ、釈迦の人生を五つの時期に分けて、多くのお経を分類した。

①華嚴時：華嚴経

②阿含（あごん）時：阿含経、法句経など

③方等（ほうどう）時：大方等大集経、阿弥陀経、大宝積経、大日経、金光明経、維摩経、勝鬘経、解深密経など

④般若時：大般若経、金剛般若経、般若心経など

⑤法華時：妙法蓮華経二十八品を中心とする法華三部経、大般涅槃経、観無量寿経

すなわち、

①華嚴経は、釈迦が成道後まもなく悟りの内容をそのまま説いた經典であり、一即多、多即一の純粋な大乘哲学であるので、その内容が大変難しく、だれにも理解できなかった。

②それで次に、煩惱を取り除くための四諦・八正道の実践的な阿含の教えを説いた。しかしこの欲望否定の余りに倫理的な教えでは生命の喜びがない。これでは修行者だけの悟りの哲学と言わざるをえない。

③それでその次に、個々人が勝手に悟ってしまう小乗の立場を否定する方等の教えを説いた。

④そして更に次には、大乘仏教独自の空の思想を説いたのが、般若の時期なのである。

⑤そして、最終的に入滅の8年前になって説かれたのが法華経だったのである。

これを大雑把にわかりやすく言えば、①の華嚴経は釈迦の本音、②③④は便法としての教え、⑤の法華経は、それらを総合した最終的な教えであると言っても良い。

華嚴宗（けごんしゅう）は、中国において、華嚴経を究極の経典として、その思想を抛り所としてできた宗派である。開祖は杜順、第2祖は智儼、第3祖は法蔵、第4祖は澄観、第5祖は宗密と相承されている。また古代新羅にも伝わり、義湘によって広められる。

日本における華嚴宗は、第3祖・法蔵門下の審祥によって736年に伝えられた。金鐘寺（東大寺の前身）の良弁の招きを受けた審祥は、この寺において華嚴経に基づく講義を行い、その思想が反映されて東大寺盧舎那仏像（奈良の大仏）が建立された。東大寺の華嚴宗は、日本仏教の黎明期に重用されたが、最澄や空海の平安仏教の隆盛により、徐々に衰えていった。

鎌倉時代には、明恵は華嚴の教えと密教との統一・融合をはかり、この教えはのちに華嚴密教と称された。明恵の華嚴密教では『仏光観・光明真言・曼荼羅図』が極楽往生の奥義になっており、明恵は臨終の間際に、曼荼羅図の前で『光明真言・文殊五字真言』を唱えていたと伝えられている。

高山寺の寺号は、華嚴経の「日出でて先ず高山を照らす」という句によったといわれている。高山寺は、華嚴密教の道場として明恵が「度賀尾（とがお）寺」という古寺を再建したものである。明恵は日本における華嚴宗中興の祖と言って良い。

明恵については、私の論文『明恵の思想「あるべきようは」』がある。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/myouearu.pdf>

その中から、華嚴経に関する部分を紹介しておきたい。

明恵は「夢を生きる」ことによって自己実現を図り、華嚴と真言の世界を統合した新しい世界、それは21世紀の哲学にも通じ得るまったく新しい世界であるが、そういった新しい華嚴の世界の先達となった誠に希有な人であるが、河合隼雄によれば、そのすべてがそれら膨大な夢の記録によって解明できるのだそうだ。

それでは、河合隼雄の名著「明恵夢に生きる」（1987年、講談社）を勉強することにしよう。

しかし、その前に、明恵の「あるべきようは」の思想の背景となっている「華嚴哲学」のことを少しお話ししておきたい。その上で、河合隼雄の「明恵夢に生きる」を勉強することにしよう。！ 自由と不自由、平等と不平等、善と悪、権利と義務、父性本能と母性本能、陽と陰・・・、世の中というものはひとつの価値観だけでやっていけない。禅の言

葉に「両頭截断して、一剣天に依って凄まじ」という言葉があるが、これはそのことを言っているのであり、白とか黒とか・・・、そういう相対的な認識の仕方というものを戒めている。白でもあり黒でもあると同時に白でもないし黒でもない・・・そういう絶対的な認識に立つべきとの教えである。こういう絶対的な認識の仕方からいくと、白か黒かという区別ができないのであるが、近代科学は、もちろん、それが白か黒かを区別しないとまあいかなければやっていけないのではないか。そういう思考の延長線上にキリスト教などの一神教があるが、本来、存在というものはそういうものではないだろう。存在というものは、そういう白とか黒とかという相対的な認識を超越したものであり、白との関係黒との関係が問題なのである。

京都大学100周年記念の記念講演会が2003年（平成15）の秋に東京であり、河合隼雄さんが「日本人の心のゆくえ」と題して講演を行なわれた。近代科学は、普遍性を求めるものであり、したがってあらゆる存在の明確な区別、言い換えれば、関係性の截断が必要である。華嚴宗というものは、そういう近代科学の原理とは全く違うことをやったのであり、近代科学が否定した関係性を重視する。全関係の総和としての存在というものは、名前がつけられないから「無」と言わざるを得ないが、華嚴宗ではそれを「拳体性起（きょたいせいぎ）」という。生け花というものは、存在が拳体性起（きょたいせいぎ）するもっともいい形を求めるものであり、そういう意味で、「存在が花している」のである。こういう日本文化の存在論からすると、存在の現れとしてそこに花がある。すべてのものは存在から出てきた。私は、存在が岩井國臣しているのである。最後は、西洋文化と日本文化の共生の必要性を訴えられ、今後我々日本人は矛盾システムを生きていかなければならないと言われたのであるが、その思想的背景として、まあ、そういう日本文化の存在論、つまり拳体性起（きょたいせいぎ）ということはいわれたと思う。しかし、私は長い間、拳体性起（きょたいせいぎ）ということがよく判らなかつた。どんな辞書を引いても出てこないのである。

ところが、武家社会源流の旅の行き着く先に明恵（みょうえ）がいるのではないかとの考えから、私は、河合隼雄さんの著書「明恵 夢を生きる」（京都松柏社）を勉強して・・・やっとな拳体性起（きょたいせいぎ）ということが判った。以下に河合隼雄さんの説明を紹介しておきたい。

華嚴思想の究極は、法界縁起にあると言われたりする。この法界という語は簡単には説明し切れないことのようにだが、一応「望月仏教大辞典」を見ると、いろいろな意味が書かれている。そのなかで「華嚴教学では」という項を示すと、「<現実のありのままの世界>と<それをそのようにあらしめているもの>との二つの相即的に表現する言葉として用いられる。云々・・・」となっている。（註；相即的という言葉もあまり使わない言葉

であるので分りにくいと思うが、相は二つ以上のものの関係をいい、即はぴったりくっついている様を言うので、相即的とは、相対的な関係にあるいくつかのものを本来はひとつであると理解する・・・そのような理解の仕方をいう。)

法界はまず出発点として、＜現実のありのままの世界＞であるが、＜それをそのようにあらしめているもの＞は何かを考え出すことによって、その意味合いが変わってくるのである。それを華嚴思想では、事法界、理法界など四種の法界の体系に組織化している。

事法界はわれわれが普通に体験している＜現実のありのままの世界＞で、そこでは、それぞれの事物は明確に他と区別されて自立的に存在している。これは「華嚴的な言い方をすれば、事物は互いに礙（さまた）げ合うということ。AにはAの本性があり、BにはB独自の性格があつて、AとBとはそれによつてはつきり区別され、混同を許さない」という状態である。

ところが、このように事物を区別している境界線を取りはずして、この世界を見るとどうなるだろうか。『限りなく細分化されていた存在の差別相が、一挙に無差別性の茫々たる無差別性の空間に転成する。この境位が真に覚知された時、禅ではそれを「無一物」とか「無」と呼ぶのであるが、華嚴の述語によると、このように見られた世界が「理法界」ということになる。・・・中略・・・。理法界の「空」は、「無」と「有」の微妙な両義性をはらんでいる。したがつて、無限の存在可能性である「理」は、一種の力動的、形而上的想像力として、永遠に、不断に、至るところ、無数の現象的形態に自己分節していく。・・・「空」（「理」）の、このような現れ方を、華嚴哲学の述語で「性起」と呼ぶのである。

華嚴哲学において、「性起」の意味を理解することは重要であるが、井筒俊彦によれば、一番大切な点は、それが挙体「性起」であるという。つまり、井筒によれば、「理」は、如何なる場合でも、常に必ず、その全体を挙げて「事」的に顕現する。だから、我々の経験世界にあるといわれる一切の事物、そのひとつ一つが、「理」をそっくりそのまま体現している・・・井筒はこのように言っている。

河合隼雄の説明はさらに続くが、ここではこの程度の紹介にとどめておきたい。再度申しておきたい。近代科学は、普遍性を求めるものであり、したがつてあらゆる存在の明確な区別、言い換えれば、関係性の截断が必要である。華嚴宗というものは、そういう近代科学の原理とは全く違うことをやったのであり、近代科学が否定した関係性を重視する。全関係の総和としての存在というものは、名前がつけられないから「無」と言わざるを得

ないが、華嚴宗ではそれを「拳体性起（きょたいせいぎ）」という。生け花というものは、存在が拳体性起（きょたいせいぎ）するもっともいい形を求めるものであり、そういう意味で、「存在が花している」のである。こういう日本文化の存在論からすると、存在の現れとしてそこに花がある。すべてのものは存在から出てきた。私は、存在が岩井國臣しているのである。

さあ、それでは河合隼雄の「明恵夢に生きる」から華嚴經に関する部分をピックアップしよう。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yumemoku.html>

明恵は、16歳のとき出家、東大寺戒壇院で受戒し、尊勝院弁暁・聖椿について華嚴(けごん)・抑舎(くしや)を受学、また密教を興然・実尊に、禪を栄西について学んだ。

21歳ころに神護寺の別院梅尾(とがのお)山(十無尽院)に住し、東大寺尊勝院に赴いたが、寺僧間の争いをいとい、23歳のとき生誕地に近い白上(しらかみ)山地にこもり、あるいはときに神護寺に帰住するなどして、《華嚴經》関係の仏典の研究をした。

明恵はかねてインド仏跡参拝を計画していたが、1203年(建仁3)春日明神の神託により断念、05年(元久2)にも再度渡印の計画を実行に移そうとして《天竺里程書(印度行程記)》を作成したが、急病のため念願を果たせなかった。!06年(建永1)11月に後鳥羽院から梅尾の地を賜り、弟子義林房喜海などを伴って移り、《華嚴經》の〈日出先照高山嶺〉より高山寺と称することにした。まず金堂を造り、運慶・湛慶により釈尊や四天王像などが造られ、その後諸堂が整備された。金堂の裏山を楞伽(りようが)山と名付け、山中に花宮殿・羅婆坊と称する草庵を設け、巨石を定心石と名付けてときに寺中より逃れ、經疏を読み、坐禅入観の場とした。釈尊の遺跡になぞらえたもので、その旧跡が山中に現存している。

承久の乱のとき、公縁の妻女などをかくまい捕らえられたが、かえって北条泰時の帰依をうける機縁となった。また公縁の妻女は善妙寺にあって明恵について出家し、仏道修業の指導をうけ、高山寺尼經といわれる小冊子本の《華嚴經》(40巻本)が残っている。

法然の浄土教に反駁した《催邪輪(さいじやりん)》をはじめ、《華嚴唯心義》など《華嚴經》に関する著作が多く、《四座講式》はことに著名である。若いころからたびたび夢を受け〈夢の記〉を伝え、また栄西より茶の実を得て、梅尾に茶を植えていわゆる〈梅尾茶〉を栽培した。

ところで、明恵がなぜ華嚴の教えと密教との統一・融合を図る必要があったのか？ 一言でいえば、『東大寺の華嚴宗は日本仏教の黎明期に重用されたが最澄や空海の平安仏教の

隆盛により徐々に衰えていったのであり、再び華嚴宗の教えを広めるためには、密教的要素を取り入れざるを得なかった』ということになるが、その点についてはもう少し詳しい説明が必要である。

幸い、私には『内村鑑三の「代表的日本人」』という論文がある。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/utikandai.pdf>

最後に、その中の華嚴経に関する部分を要約し、その補足説明をして筆を置きたいと思う。

日本の天台宗は、その初めから、すでに華嚴ないし『大乘起信論』の思想をとりこんでいる。最澄は、天台法華の教学を研究するまえに、華嚴の論書や『大乘起信論』を紐解いたのであり、中国に赴いて習得した天台教学は、華嚴宗と交渉を持つに至ったところのものである。

最澄は法華が華嚴より優れていることを主張してはいるが、その法華を超勝的な一乗(根本法華、果分法華)とみなしたり、また真理の生成(真如隋縁)を説いたりするところには、明らかに華嚴哲学の摂取がうかがわれる。根本一乗の観念は、本来は華嚴について立てられたものである。それを最澄は、法華にとりこんだのである。このように、日本天台は、その最初において天台法華思想と華嚴思想とを統合する位置にあったといえる。

その後、比叡山では、円仁・円珍・安然によって密教思想が一段と推進されたが、それは、叡山中興の祖といわれる良源から弟子の源信、覚運へと受け継がれ、さらに平安末期から鎌倉中期にかけて、仏教の代表的な諸教理の一元論的な思想が作られていった。これを名づけて天台本覚思想という。天台本覚思想では、天台の性具説と華嚴の性起説とが完璧に統合されている。その思想は、「多種多様な事象が生起・変滅する現実の姿こそは、永遠・普遍的な真理の生成躍動の姿であり、そこにこそほんとうの生きた真理がある。」というものであるが、哲学的には大変に高い価値を有するものであると評価することができる。現実肯定のため修行不要の墮落思想として批判されることにもなるが、それは誤解であって、天台本覚思想は決して墮落思想ではない。多種多様な事象が生起・変滅する現実の姿というのは、仏性の現起、すなわち仏性が現実に発起したものであり、いわば仏

の命の表現活動であるから、煩惱に喘ぎながらも仏を信じて精進していれば、菩薩になる可能性がある。仏性とはそういうものだというのが華嚴の教えである。これは法華經の教えと矛盾はしない。草木国土悉皆成仏という天台本覚思想は、法華經の教えそのものなのである。

天台本覚思想の段階で、天台密教は、思想的に真言密教をはるかに超えてしまったと思う。しかし、天台密教といえども、『法華經』の徳を最大限にまで高めていたはずの最澄の正義を隠してしまった。したがって、日蓮は、空海（真言密教）のみならず、円仁（天台密教）についても、法華經を究極の教えとしないという点で間違っていると指摘するのである。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/mikkyouhihan.html>